



Data

監督：白石和彌
原作：『ひとよ』 桑原裕子
出演：佐藤健／鈴木亮平／松岡茉優
／佐々木蔵之介／田中裕子
／音尾琢真／筒井真理子／
浅利陽介／韓英恵／MEG
UMI／大悟（千鳥）

👁️👁️ みどころ

白石和彌監督の2019年第3作のテーマは、男たちのバイオレンスに溢れた『凶悪』（13年）や『孤狼の血』（18年）とは大違いの、家族の絆。とは言え、暴力を振るう父親を母親が殺したのは、「3人の子供達を守るため」「これによって子供たちは自由に生きられるようになった」という理屈は、通用するの？

それから15年後、約束通り（？）母親は家に戻ってきたが、「戦争を知らない子供たち」ならぬ「父親殺しの母親を持った子供たち」というレッテルを貼られた3人の兄弟妹の生き方は？「こんな女に誰がした？」は歌謡曲では立派な主張だが、本作にみる「こんな俺（私）に誰がした？」のオンパレードは如何なもの？ハッピーエンドにもかなり違和感があるが、さてあなたは？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■白石和彌監督最新作のテーマは家族の絆！■□■

白石和彌監督の『凶悪』（13年）（『シネマ31』195頁）は、宮本太一の原作『凶悪—ある死刑囚の告発』を、『孤狼の血』（18年）（『シネマ42』33頁）は、柚月裕子の原作『孤狼の血』を映画化したものだった。前者は、綿密な取材から発掘された身の毛もよだつような実話、後者は、女性作家の原作とは思えない「警察小説×仁義なき戦い」を映画化したもので、男たちのバイオレンスを中心に、ダイナミックな展開を見せる映画だった。

それに対して、4月の『麻雀放浪記2020』（『シネマ45』未掲載）、6月の『凧待ち』（『シネマ45』未掲載）に続く、白石監督の2019年第3作目となる本作は、桑原裕子の原作『ひとよ』を映画化したもの。『ひとよ』というひらがなのタイトルだけでは誤解を

招く危険もあるが、サブタイトルの『一夜』をみれば、本作が「ひと夜」の出来事によって重荷を抱えた人生を送らなければならなくなった家族の再会と再出発を描いた映画であることがわかる。つまり、本作のテーマはズバリ「家族の絆」だ。そんなテーマは前4者とはまったく異質のものだから、冒頭からストーリーは淡々と進んでいく。しかし、いくら家族の物語であっても、白石監督のダイナミックな映画作りの手法は本作でも健在！

■□■母親はなぜ父親を殺したの？冒頭から重いテーマが！■□■

本作は、3人の子供たちの母親で、夫が営む稲村タクシーを手伝っている田中裕子扮する妻・こはるが、運転手姿で帰宅するシークエンスから始まる。そこでのこはる本人の顔は暗く、家の中も暗い。長男・大樹と、長女・園子は、テレビを見ているが、2人とも顔や体に傷を負っている。帰宅したこはるは、母屋からこれも傷を負っている次男・雄二を呼んだうえで「父ちゃんを殺した」と告げたから、子供たちはビックリ！こはるの説明によれば、これは「父親から過度な虐待を受け続けている子供たちを守るため」であり、「父親を殺したことによって子供たちは自由を獲得し、これからいかようにも生きることができるようになったから、そんな自分を誇らしく思う」そうだ。なるほど、なるほど。

ドストエフスキーの『罪と罰』では、若き主人公ラスコリニコフによる金貸し老婆の殺害について「レッキとした理屈」があったが、それと同じように、こはるの夫殺しについてのそんな理屈は正当なもの？もっとも、そんなことを冒頭からいきなり言われても、子供たちは……。こはるはなぜ確信的に夫殺しの罪を犯したの？本作は、冒頭からそんな重いテーマが！

他方、こはるはそのまま警察に自首したが、こんな場合、夫殺しの犯人である妻・こはるの刑罰は？弁護士の活躍如何では、ひょっとして執行猶予が付くの？それとも、やっぱり実刑は免れないの？その場合、刑期は？そして、仮釈放は？弁護士の私にはそんな興味もあったが、本作では、いみじくもこはるが言ったように「15年」が大きなポイントになるので、その時間の重みに注目！

■□■あれから15年。子供たちが背負わされたものは？■□■

2018年のNHK大河ドラマ『西郷どん』で、体格からしてもいかにも西郷隆盛ピタリの演技を見せた鈴木亮平が、本作では吃音障害を持ちながら今は稲丸タクシーの専務になっている15年後の長男大樹役を演じている。あの事件後、稲村タクシーが倒産せず、稲丸タクシーと名前を変えて存続できているのは、社長に収まっているこはるの甥・丸井進（音尾琢真）の人格と努力のおかげらしい。大樹は今そこで専務として働いていたが、後の2人の子供たちは？

12月27日に公開される『男はつらいよ 50 お帰り 寅さん』は、同作の主人公になっている寅さんの甥・満男が妻の7回忌の法要のため、葛飾・柴又にある実家に集まると

ころから始まるが、本作もそれと同じように、父親の法要のため家族が集まる物語からスタートする。もっとも、父親のお墓参りをまともにしているのは長男の大樹だけで、長女の園子（松岡茉優）は、お墓参りには一緒に行ったものの、お墓を蹴飛ばす有り様だ。また、今は東京に出てフリーライターをしている次男の雄二（佐藤健）が、たまたま（？）そんな実家に戻ってきたのは幸いだっただ（？）が、これでまともな法要ができるのか『真さん』シリーズの「くるまや」の茶の間で展開される家族や親しい面々の語らい（昔話）が楽しさに満ち溢れていたのに比べると、本作での法要終了後の語らいは陰鬱そのものだ。しかして、あの事件から15年、こはるは本当にこの家に戻ってくるのか？

こはるが15年もの間、刑務所その他でどんな苦勞をしたのかは知らないが、3人の子供たちも、この15年間それぞれ大きな苦勞をしたらしい。その原因は、ひとえに「父親殺しの母親を持った子供たち」というレッテルを貼られたため。あの時、こはるは「父親を殺したことによって子供たちは自由を獲得し、これからいかにようにも生きることができるようになった」と言っていたが、実態は全然そうではなく、否応なく重たい荷物を背負わされたわけだ。なるほど、なるほど。

もっとも、この時点で私には、なぜこはると3人の子供たちとの連絡が15年間も途絶えているのかという疑問がある。つまり、3人の子供たちが刑務所に入っているこはると手紙を交換したり、面会して話をするのが15年間一度もなかったのかということだ。現実問題としてそんな違和感があるが、それは横に置いて、白石監督が描くストーリーの中にどっぷり浸らなくちゃ。

■□■ 3人のバラバラぶりに注目！不幸はすべて母親のせい？ ■□■

15年前の3人の子供たちはそれなりに仲が良かったようだが、今はバラバラらしい。もっとも、子供の時から雄二と園子の対立は激しく、大樹はいつもその仲裁役になっていたが、それは今も同じ。雄二は今、東京で三流雑誌の記者をしているが、上昇志向が強く、小説家を目指しているらしい。そんな夢を持っていることは導入部でも暗示されるが、所詮そんなことは夢のまた夢・・・？父親の法要のため実家に戻っている雄二が、これからそこですようとしているのは一体ナニ？

他方、「夫殺し」の大見出しで週刊誌に載ったこはるは、ある意味で「父親の暴力から子供たちを守ったマドンナ」だが、同時にその子供たちは、父親殺しの母親を持った子供たち。「戦争を知らない子供たち」に戦争責任が無いのと同じように、大樹、園子、雄二に父親殺しの責任がないのは当然。また、父親殺しの母親を持ったことも、子供たちの責任ではないはずだ。ところが、日本の社会では？

15年前のあの殺人事件以降、世間サマからそんな差別を受け続けた3人は、三人三様の苦勞をしたらしい。そのために、雄二は一流会社に就職できなかったし、園子は美容師の資格を取れなかった。本作では、それが雄二と園子の言い分らしい。また、大樹の吃音

が治らないのも、そのためらしい。しかし、3人兄弟の中で大樹だけが母親に何の文句も言わないのは立派。最も手厳しく母親を批判しているのは雄二で、いつまでも一方的な主張をする雄二に対立するのが園子だ。しかし、雄二や園子たちが言うように、希望通りの仕事に就けなかったのは、すべてそんな母親のせいなの？戦後すぐの1947年に菊池章子が歌って大ヒットした歌謡曲に、いわゆるパンパン（夜の女）をテーマにした『星の流れに』があった。「こんな女に誰がした？」と歌われるラストの歌詞は、あの時代状況下ではそれなりの説得力と納得感があった（？）が、さて今は・・・？

日本では今、萩生田大臣の「身の丈」発言がマスコミでも国会でも厳しく叩かれている。しかし、私は作家・ジャーナリストの門田隆将氏が1月10日付産経新聞の「新聞に喝！」で「国民に見放される“揚げ足取り”記事」というタイトルで書いているのと同じ意見で、「身の丈」発言のどこが悪いの？と考えている。つまり、世の中には、さまざまな形で格差があるのが当然で、人はそれぞれそれを乗り越えて生きていかなければならない、と私は考えているわけだ。そんな視点で考えると、あれこれと母親のやったことに文句を言わない大樹が普通で、自分たちの不幸の原因を、すべて父親を殺した（殺してくれた）母親のせいだとする雄二と園子はいかがなもの・・・？

■□この嫌がらせ事件は誰が？何のために？その波紋は？■□

本作はこはると3人の子供たちの母子の絆、そして15年もの間刑務所にいってしまった母親に会えないまま育った3人の子供たち同士の確執をメインテーマにしたもの。原作とは多少設定を変え、ストーリーを変えているが、田中裕子の毅然とした殺人犯ぶり（？）に象徴される、毅然とした演技は一貫している。このように、こはるの生き方が良くも悪くも一貫しているのに対し、3人の子供たちの生き方はハッキリ言って少し不様だ。

吃音のハンディを持ちながら、稲丸タクシーの専務として運転手を兼ねることもいとわれない大樹の勤勉ぶりはそれなりのものだが、本作ではとりわけ雄二の生き様が私にはカッコ悪く思えてくる。それを批判ばかりしている園子も、同じだ。この2人はいい年をして一体どんな仕事をやり、どれだけの収入を得ているの？とりわけ、東京で勤めているはずの雄二が、いくら三流雑誌社とはいえ、どんな名目で、いつまでも実家で過ごしているのか、私にはさっぱりわからない。

本作中盤では、法要までは何の事故もなく営業していた稲丸タクシーの車や建物に、父親を殺した母親をなじる、いやがらせの落書きをされたり、ビラを配られたり、タイヤをパンクさせられたり、という明らかに刑法上の威力業務妨害罪に該当する行為が相次ぐので、それに注目！これは一体誰が？そして何のために？それを発見した稲丸タクシーの社長や専務として園子たちは、こはるを傷つけないため落書きを消したりビラを回収したりしたが、そんな事件が相次ぐと・・・？

本作中盤はそんな嫌がらせ事件の展開とその謎、そしてその波紋の広がりポイントに

なるので、それに注目！

■□■元ヤクザの父子関係と大樹の離婚問題の是非は？■□■

佐々木蔵之介は中井貴一と共演した『嘘八百』（17年）（『シネマ41』72頁）でいい味を見せたこともあって、2020年1月31日からはそのパートⅡたる『嘘八百 京町ロワイヤル』が公開される。その他、彼は主役でも脇役でもいつもいい味を見せる俳優だが、本作で堂下道生役に扮した彼は稲丸タクシーの面接試験を受けるシーンに登場する。そして、いくつかの場面でえらくクソ真面目な新人運転手としての役割を果たしていたが、彼は本作で一体どんな役割を？私は当初からそれに注目していたが、ある時点で、久しぶりに面会した息子と楽しい休日を過ごすシークエンスが登場するのでアレレ……。こりゃ一体ナニ？そう思っていると、実はこのこのクソ真面目な新人運転手・堂下道生の正体は……。？この運転手とその息子の確執を巡るストーリーが本作に入っていることに、私はかなり違和感がある。もっとも、それによって本作のクライマックス直前のカーチェイスのアクションシーンが意味をもってくるから面白いという見方もあるのだろうか……。

他方、本作を見ている限り、長男大樹が3人の兄弟妹の中で1番まともそうだが、それでも妻の二三子（MEGUMI）には我慢のならない夫らしい。それは、家族の絆の崩壊とその再生という本作の基本ストーリーの中に時々割り込んでくる2人の夫婦ゲンカの姿をみればよくわかる。家庭内のこと、夫婦のことは2人の話し合いで。それが社会の常識だが、ある日、妻の二三子が稲丸タクシーを訪れて大樹に離婚を迫る姿を見ていると、こりゃよほどのこと。言うことを言って離婚届の用紙を残して出ていく二三子に対し、大樹は「俺は絶対離婚しない」と叫んでいたが、これまた一体なぜ？弁護士歴45年の私は離婚問題も多数処理してきたが、ここまでこじれているのなら、二三子は当事者間でワーワーと言い争いをするのではなく弁護士に頼んで離婚調停を出すのが筋。そこで二三子の言い分をしっかりと主張すれば、慰謝料や養育費がいくらとれるかはともかく離婚自体は容易なはずだ。もちろん本作は大樹と二三子夫婦の離婚騒動を描くものではないからそんなストーリーは登場させないが、私に言わせれば、本作にこんな夫婦間のトラブルを登場させるのはハッキリ言って余分。たとえ原作で詳しく書かれていたとしても、白石和彌監督が映画化するにあたっては、その部分を大胆にカットすべきだったのでは？

元ヤクザの父子関係と大樹の離婚問題について、私はそう思うのだが、さてあなたは？

■□■結末は如何に？ハッピーエンドは如何なもの？■□■

『ひとよ』と題された桑原裕子の原作は、ある「一夜」の出来事を契機として崩壊してしまった家族の15年後の再会と再生の物語。そこでのテーマは「家族の絆」だから、それが崩壊したままではおさまりが悪いので、結末はどうしても家族の再生になる。1つの曲が終わる時、ドミソの和音で終わるのが落ち着きがいいのと同じで、ハッピーエンドに

すれば落ち着きがいいのは当然だ。しかして、2019年11月5日付朝日新聞一頁全面の公告では作家のあさのあつこ氏が本作の魅力を語っているが、そこで彼女は、「タイトル『ひとよ』は『一夜』を意味するそうですが、私は今もなお『人よ、人よ』と呼びかけられ問いかけられている気がしています。」と語っている。また、同時に彼女は「同じ母親として最初は、自分を犠牲にしても子どもを守るのが母親だから、こはるの罪もしかたないと捉えていたのですが、鑑賞後、実は子どもを守っているつもりで傷つけてしまうこともあるんだと思い、この親子のぎくしゃくした関係は、こはるの独りよがりをもたらしたものだ気づかさされました。」とも語っている。それはそれとして理解できる解釈だ。しかし私としては、母親による父親殺しの是非、そして父親殺しの母親をもった子供たちというレッテルを貼られたことによって生き方を見失った3人の子供たちという設定の本作には、決してハッピーエンドが似つかわしいとは思えない。ちなみに、ドストエフスキーの『罪と罰』はハッピーエンド？その解釈を含め、本作をハッピーエンドで終えたことについてのあなたのご意見は？

2019（令和元）年11月15日記